

## 2025年3月2日（日）「時間軸を超えて」

ヨハネの黙示録 11:14-19

14 第二の災いは過ぎ去った。見よ、第三の災いがすぐにやって来る。

15 さて、第七の天使がラツパを吹いた。すると、さまざまな大きな声が天に起こって、こう言った。「この世の国は、私たちの主と、そのメシアのものとなった。主は世々限りなく支配される。」

16 神の前で座に着いていた二十四人の長老は、ひれ伏して神を礼拝し、17 こう言った。「今おられ、かつておられた方、全能者である神、主よ、あなたに感謝いたします。あなたは大いなる力を振るい、支配されたからです。18 諸国の民は怒り狂い、あなたも怒りを現されました。死者の裁かれる時が来ました。あなたの僕である預言者、聖なる者、あなたの名を畏れる者には、小さな者にも大きな者にも報いが与えられ、地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時が来ました。」

19 そして、天にある神の神殿が開かれ、その神殿の中に契約の箱が見えた。すると稲妻、轟音、雷鳴、地震が起こり、大粒の雹が降った。

### 【序論】

ヨハネの黙示録を理解するためには、「時間」という概念を取り外す必要があります。私たちが感覚的に持っている「過去」「現在」「未来」という時間軸に縛られていると、本書で書かれている記事が行ったり来たりしているように見えて、読者は目を回してしまうでしょう。むしろ、人間が「過去・現在・未来」と呼ぶ事柄が神の目には同時的に見えているということを理解しておかなくてはなりません。神は時間に拘束されることのないお方だからです。私たちがまだ見えていない事柄も神には見えているのです。歴史のある段階で起きた出来事が終末的な意味を持っていたということもある。いえ、創世記から黙示録まで、私たちは歴史を「線」として見てしまいましたが、神の目には「面」として見えていて、出来事と出来事は関連し合い互いに意味を持っているのです。

今日の記事を学ぶに当たっても、ここに書かれていることは私たちがまだ見えていない事柄ではありますが、実は現在の私たちの生活とも関わりを持っていることを念頭に置いておく必要があるでしょう。現在を生きながら同時に過去も未来も見る、黙示録はそういう視点を読者に持たせようとしているのです。

### 【本論】

#### 本論 1. 天使たちの賛美 (15 節)

**第二の災いは過ぎ去った。見よ、第三の災いがすぐにやって来る。(11:14)**

以前に学んだことを振り返りますと、第一の災いとは9章の前半に出てきた「アポリオン」という名前のバツタによる災い、第二の災いとは9章の後半に出てきた「四人の天使」と「二

億の騎兵」によって三分の一の人間が殺されたという災いです。そして、二つの幕間劇（10章、11:1-14<sup>i</sup>）を挟んで「第七の天使のラッパ」が吹き鳴らされ、「最後の審判」と呼ばれる「第三の災い」が臨みます。これが最後のラッパであり、決定的な終末を告げるものです。これは悪の勢力が完全に滅ぼされる時ですが、その具体的な審きの内容は16章の「七つの鉢」のところで描かれることになります。ですから、今日の箇所は「最後の審判」をチラ見していると理解しておいていただければよいでしょう。

さて、第七の天使がラッパを吹いた。すると、さまざまな大きな声が天に起こって、こう言った。

「この世の国は、私たちの主と、そのメシアのものとなった。主は世々限りなく支配される。」

(11:15)

「さまざまな大きな声」とは、多くの天使の声と天に召された神の民の声が共鳴しているものと思われまゝ。彼らは「支配権の移行」について語っているのですが、人間の世界を長きに亘って支配してきた悪魔とその手先がついに滅ぼされ、父なる神と子なるキリストのものになったということです。父と子は一体であり、御座も王権もひとつです。

「この世の国」を支配してきた者についてふれておきますと、一般大衆が見ている世界では歴史の表舞台に出てくる国家の支配者がトップにいるように映っていますが、実は「超国家」と呼ばれる力が背後で働いていて諸国家を動かしている。そのことを理解するとき、この世の深い闇が垣間見えてきます。いわゆる「ディープステート」とその上にいる人々であり、共産主義思想を作り出した人々です。彼らが目指す「世界共産化」は、黙示録が暗示する「大バビロン」という名の終末的な世界政府につながるのではないかと私は見えています<sup>ii</sup>。

## 本論2. 長老たちの賛美 (16-18 節)

神の前で座に着いていた二十四人の長老は、ひれ伏して神を礼拝し、こう言った。「今おられ、かつておられた方、全能者である神、主よ、あなたに感謝いたします。あなたは大きいなる力を振るい、支配されたからです。諸国の民は怒り狂い、あなたも怒りを現されました。死者の裁かれる時が来ました。あなたの僕である預言者、聖なる者、あなたの名を畏れる者には、小さな者にも大きな者にも報いが与えられ、地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時が来ました。」

(11:16-18)

「二十四人の長老」は4章に出てきましたが、贖われた民または普遍的な教会を意味します。彼らが再び賛美を始めますが、ここで彼らが神について述べている称号に注目したい。「今おられ、かつておられた方」であって、「やがて来られる方」がなくなっているのです。これは、神の統治が完成したことを意味しているのでしょう。審判が待ち望まれていた、そしてそれはついに成就したということです。彼らが語っている内容は三つに整理することができます。

- ① 神の支配への感謝
- ② 諸国の民の怒り／審き
- ③ 神を畏れる者への報い

① 神の支配への感謝

「あなたは大きい力を振るい、支配されたからです。」

悪魔とともに「この世の国」の支配を作り上げてきた人々も、ついにその王国が打ち倒される時が来ました。過去にも、「帝国」と呼ばれる国々はどこかで必ず衰退してきましたが、終末的な世界政府が崩壊する日が来るのです。それがどのような形で成就するかは、16章の内容を通して学ぶことになります。そこでは七人の天使による審きが行なわれます。

② 諸国の民の怒り／審き

「諸国の民は怒り狂い、あなたも怒りを現されました。」

諸国の民は何に対して怒るのでしょうか。自分たちが築き上げた王国が破壊されることのゆえにか、神の審きがあまりに苦痛に満ちているからでしょうか。16章では、審きの様子が、悪性の腫れ物、海水も川の水も血に変わる、灼熱の太陽、暗闇、水の干上がり、天変地異という内容で示されます。出エジプトにおける十の災いと似通ってはいませんが、帝国が巨大であるだけに地球規模の審きが行なわれるのでしょうか。諸国の民は怒るばかりで悔い改めることがありません。もはや悔い改めの余地は残されていないからです。

③ 神を畏れる者への報い

「あなたの僕である預言者、聖なる者、あなたの名を畏れる者には、小さな者にも大きな者にも報いが与えられ、地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時が来ました。」

「預言者」とは福音の宣教者、その中には殉教に至った人々もいます。あらゆる危険を掻い潜って信仰に立ち続けた人々に、ふさわしい報いが与えられる。栄光の冠は各々の地上における生き方に応じて大きさや輝きが異なります。信じる者には一人も洩れなく与えられますが、他人の冠はおそらく見えないのでしょうか。神の国においては、神と自分との絶対的な関係のみが見え、人と人との相対的な比較はなくなるからです。地上に混乱をもたらしていた者たちは、まさに人間を「相対」によって争わせてきたのです。

本論 3. 神殿の契約の箱 (19 節)

そして、天にある神の神殿が開かれ、その神殿の中に契約の箱が見えた。すると稲妻、轟音、雷鳴、地震が起こり、大粒の雹が降った。(11:19)

「神殿」「契約の箱」とは、旧約的な意味において神が民と共におられることを象徴するものです。インマヌエルの表現として、イスラエルには神殿が建てられ、その至聖所に契約の箱が置かれました。しかし、宗教が形骸化したとき、神殿は神が臨在される場所ではなくなり、ソロモンが建設した神殿は紀元前 586 年にバビロンに破壊され、神殿の中にあつた契約の箱も焼かれました。第二神殿としてゼルバベルが捕囚からの帰国後に建設し、主イエスの時代には第三神殿としてヘロデ神殿が建てられていました。これらの形あるものは幾度も

時の帝国によって壊されてきました。しかし、主イエスは人々に全く異なる神殿理解を示されたのです。

**イエスは答えて言われた。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」《中略》イエスはご自分の体である神殿のことを言われたのである。(ヨハネ 2:19-21)**

主イエスは自分自身を「神殿」と呼んでおられました。神が人となって世に来られた。主イエスが地上におられるということはつまり、神が人と共にあるということの意味した。そして、主イエスは昇天後、ご自身の霊である聖霊を送り、聖徒たちの内に住まわせてくださいました。パウロは自分の内に聖霊が住んでおられること、信じるすべての人の内に同じ御霊がおられることを知っていました。そして、彼はキリスト者自身を「神殿」と呼んだのです。

**知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。(I コリント 6:19)**

とはいえ、私たちは視覚的に聖霊を見たことはありません。自分の人格が聖められ、御霊の実を結ぶとき、自分の内に聖霊が住んでおられることを知るのです。しかし、世の終わりには私たちは実際にこの目で神殿の中に失われたはずの契約の箱があるのを見ることになる。「稲妻、轟音、雷鳴、地震が起こり、大粒の雹」とは神の臨在を表すもので、信じない者にとっては恐怖でしかありませんが、信じる者はそこに神がおられることを認識するのです。

今日のお話の最初に、黙示録の読者は時間の概念を取っ払ってこれを読むべきであるとお伝えしました。その意味を察してくださった方もおられると思います。聖書全体は、「神殿」すなわち「神の臨在」という事柄において、最初から最後まで一貫しているのです。エデンの園では神と人とが一糸乱れぬ関係を構築していた。しかし、人の罪によってその関係は破壊された。イスラエルの民が荒野の旅をしているとき、幕屋を作ることが指示された。幕屋は神殿を先取りするものであり、神の臨在が民の中心にあることを表していました。幕屋は神殿によって受け継がれましたが、結局のところこれらは来るべきものの型に過ぎなかったのです。「来るべきもの」は主イエスの来臨によって成就しました。そして、神の国の完成のとき、最終的な意味においてインマヌエルが実現するのです。

## 【結論】

現在私たちが生きている世界は、暗躍する悪の勢力が強大な力を持っています。人口の1%の人々が全世界の富の82%を握っていると言われており、今後は更にその十分の一の人々、つまり0.1%の人々に富が集中するようになると予測されています。彼らは一般大衆を奴隷化しようとしている。私たちは確かにそういう悪い人間世界に生きているのですが、この心に持っている「神殿」は永遠の世界から流れ来る神の恵みと聖なる富であるということ覚えたい。地上の何者も私たちと神との関係を奪うことはできません。そして、最終的な神の勝利を同時的に見ながら地上の生涯を敢然と歩んでいくことができる。勝利者イエスが常に私たちと共にいてくださるからです。

## 【祈り】

過去・現在・未来という時間軸を超えて、すべてのことを同時的に見ておられる天の父なる神様。私たちにもその視点を持たせようとしてくださっていることを感謝いたします。私たちが実際に見ているものは点に過ぎませんが、聖書のことばを通して歴史の全体像が示されています。今の世に絶望するのではなく、神の摂理に目を向けて生きることができますように。インマヌエルが既に実現しているということを確認して歩めるよう、日々導いてください。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
創造の初めから世の終わりまで、聖なる計画をもって歴史を導き給う、父なる神の愛、  
永遠の世界で完成するインマヌエルを、現在の世界にもたらし給うた、主イエス・キリスト  
の恵み、  
信者一人ひとりをご自身の神殿となし、その心に住み給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。

---

<sup>i</sup> 「この 10 章は、9 章の終わりに出てきた「第六のラッパの幻」と次の「第七のラッパ」(11:15～)との間に挟まれた「幕間劇」としての性質を持っています。次回扱うことになる 11:1-14 は、もう一つの幕間劇です。」(No. 33 「もはや時がない」より引用)

<sup>ii</sup> 一例として、現在のアメリカの中央銀行 (FRB) ができた経緯を見てみると、アメリカという国家を 100 年に亘って陰で支配してきた人々がいることが分かってくる。1912 年のアメリカ大統領選はウッドロー・ウィルソン大統領が当選したが、その背後には不可解な動きがあった。ウィルソンはこの時、現職のウィリアム・タフト大統領 (共和党) を斥けて当選したが、下馬票ではタフトが二期目当選する可能性が非常に高かった。しかし、タフトのロシア問題をめぐる政策がウォール街の金融資本家 (アメリカのキングメーカー) の意にそぐわなかったため、そこに何らかの介入があったと思われる。突然共和党が分裂し「進歩党」という第三政党ができたのだ。進歩党の党首に担ぎ上げられたのがセオドア・ルーズベルトで、彼はタフトの前の大統領だった。ルーズベルトがタフトを推薦したのでタフトは大統領になれたという経緯があったのだが、今度はルーズベルトがタフトに反旗を翻すという普通あり得ないことが起きた。その背後では、何としてでもウィルソンを大統領にしなければならない大きな力が働いていた。結果、ウィルソンが三つ巴の戦いを制して大統領に就任したのだが、彼の中にはウォール街の金融資本家に対して、大統領にしてもらった恩義があった。ウィルソン大統領就任の年に FRB ができたのだが、これは 100% 民間の銀行であり、株主はロスチャイルド系、ロックフェラー系の金融資本家である。ウィルソンは FRB の本質を知らずにサインしてしまったが、このことは「ディープステート」がアメリカの金融を掌握したことを意味した。その後、最高裁判所判事も所謂「ユダヤ系」のルイス・ブランダイスが就任するが、その就任の背景にもウィルソンの弱みを握った弁護士サミュエル・アンダーマイヤーによる操作があった。ウィルソンはプリンストン大学の教授時代に不倫をしていたが、不倫相手の夫人の息子が金銭トラブルを起こし 25 万ドル (今の 100 倍) の負債を抱えてしまった。その母親の代理人の弁護士であったサミュエル・アンダーマイヤーがウィルソンを訪ねてきた。彼は当時アメリカで最も有力だった法律事務所グッゲンハイム・アンダーマイヤー、マーシャルの腕利き弁護士であった。過去に不倫相手に送ったラブレターを 25 万ドルで買い取ってほしいとウィルソンに持ちかけてきたのだ。大統領になったばかりのウィルソンにはそのような大金はなかったので、そのお金はアンダーマイヤーが工面するから、最高裁判事に空席ができた折には自分が推薦する人を判事に指名してくれと伝えてきた。その一年後に判事の欠員が生じ、そのときに推薦したのがルイス・ブランダイス (ヤコブシフ商会の顧問弁護士) であった。こうして、アメリカ史上最初のユダヤ系最高裁判事が誕生した。

アメリカのメインストリームメディアもほぼすべてユダヤ系が掌握している。アメリカの心臓部をガッチリと握った人々が 100 年に亘って政府を動かしてきていることを知るとき、同じようなことが世界各国でも行なわれてきていると推測できるだろう。彼らは「国」を持たず、国家の中核に入り込み、内側から解体していく。「ユダヤ系」という言葉は誤解を与えやすいので補足すると、彼らは血筋的にイスラエル民族と関わりがあるわけではなく、タルムードを信仰して「ユダヤ」の名を冠するようになった人々、どうしたら世界を支配できるかを代々継承している人々である。共産主義思想の出元であって、彼らの最終目標は「世界共産化」である。

(参照：馬淵睦夫『ディープステート 世界を操るのは誰か』ワック株式会社、2021 p. 20-44)